

THE JAPAN AGRICULTURAL NEWS

日本農業新聞

記事活用 エピソード集

組合員との
関係強化に



食の大切さ
学ぶ教材に



食育や
農福連携の
ヒントに

はじめに

日本農業新聞は令和4年3月17日、本紙「記事活用エピソード」の審査委員会をオンラインで開き、厳正な審査の結果、最優秀賞など入賞8作品を決定しました。

「記事活用エピソード」は、日本農業新聞に掲載された記事の中から営農や生活、勉強に役立つ記事を、読者の皆さまからエピソードとともに募集し、記事を起点にした意識・行動の変化、発展などを紹介いただくものです。

令和3年度は全国の読者の皆さまから、昨年度応募数の2倍を超える過去最高の376点の応募がありました。本紙の取材をきっかけに農福連携の先駆けとなったエピソードや人気コラムを使って子どもたちへの食育に取り組んでいる話題、地元農業の課題解決のために作文コンクールを開催した事例など、バラエティに富む作品が寄せられました。作品を読むと、愛読者からの根強

い支持をひしひしと感じ、非常に勇気づけられました。新聞の作り手としても、いずれの活用方法も学ぶべき点が多くありました。今後、応募作品は社内でも共有し、新聞製作や普及運動の訴求力の向上につなげてまいります。

日本農業新聞は昨年11月に「日本農業新聞電子版」を創刊いたしました。農業振興や地域活性化、農家の営農やくらしの発展を支える情報源として「新聞紙面を基軸とする多メディア展開」を掲げ、チャレンジを続けてまいります。ご愛読いただいております、読者の皆さまにおかれましても、この『記事活用エピソード集』をお読みいただき、本紙活用の参考にしていただければ幸いです。今後とも何とぞよろしく願います。

令和4年5月

代表取締役社長

廣田 武敏

目次

2 はじめに

3 最優秀賞

松井 賢一さん(滋賀・県普及指導員)

4 優秀賞

重田 久美子さん(神奈川・学童保育指導員)

5 長久 剛慈さん(JA広島中央)

6 奨励賞

竹田 梨夢さん(山形・高校生)

長谷川 直子さん(千葉・JA長生)

林 一美さん(岐阜・農業)

7 岡本 小百合さん(滋賀・JAこうか)

佐々井 信光さん(JA広島市)

応募のお礼

8 「記事活用エピソード」

募集のご案内

※受賞者の所属や職業、年齢は
応募時点のものです。

● 審査委員(敬称略)

〈委員長〉

● 北川 太一(摂南大学 教授)

〈委員〉

● 青山 浩子(新潟食料農業大学 講師)

● 若松 仁嗣(JA全中 常務理事)

● 廣田 武敏(日本農業新聞 代表取締役社長)



滋賀県長浜市 県普及指導員

松井 賢一さん 58歳

農福連携の先駆け 取材記事が後押し

平成12年3月15日、普及指導員として支援した「バリアフリーイチゴ園」がオープン。当時、障がい者への理解が低く「障がい者と一緒にイチゴ狩りするのは嫌」「障がい者をPRに使うなんて」等の偏見もあり出足は低調でした。

しかし、いち早く掲載されたこの記事が、このイチゴ園を成功へと導いたと当時を振り返ります(以降他紙とNHKの取材あり)。

公共性・信頼性の高い新聞に取り上げられ、周囲の空気は一転しました。このイチゴ園は、車いすだけでなく、ベビーカーの親子やストレッチャーに乗った寝たきりの方、盲学校生までが来園。「どんな方でもどこまで」というバリアフリーの考え方が、新聞の後押しを受けて「市民権」を得たと感じました。

ある来園者から「障がいを持つ娘に、イチゴ狩りは不可能と思っていましたが今日、夢のようなひ



とときを送らせてもらってほんとにありがとうございました」とお礼状が届いたとき、私は目頭が熱くなりました。

講評

日本農業新聞の記事をきっかけにバリアフリー観光イチゴ園への理解が広がり、成功につながったことに、新聞メディアとしての力を感じた。農福連携の先駆けとなる取り組みで、非常に良いエピソードだ。



車いすでも楽々イチゴ狩り

滋賀・栗東町の寺田さん

介護経験生かし施設改良 少量土壌培地耕を導入

【本紙記者 寺田 幸子】「介護経験を生かして、施設を改良して、少量土壌培地耕を導入して、イチゴ狩りを楽々楽しんでもらいたい」と、滋賀県栗東町の寺田さん(仮名)が、イチゴ園の運営に力を入れている。寺田さんは、介護経験を生かして、施設を改良して、少量土壌培地耕を導入して、イチゴ狩りを楽々楽しんでもらいたいという思いで、イチゴ園の運営に力を入れている。

●選んだ記事

車いすでも楽々イチゴ狩り
介護経験生かし施設改良
(平成12年3月15日付)



松井さんが支援した
観光イチゴ園の続報
(平成13年2月9日付)



記事中の観光イチゴ園。平成12年4月の介護保険制度開始の半月前にオープンした。バリアフリーにしたことで、多くの人に喜ばれてきた(令和4年は新型コロナウイルスなどの影響によりイチゴ狩りは中止)。



神奈川県平塚市 学童保育指導員

重田 久美子さん 72歳

「四季」を使って 子どもたちに食育

定年後に、私は学童保育を、同い年の主人も、祖父が守ってきた田畑を継ぐことになった。そんな畑の目の前に建てた学童保育所、保育理念の3本柱の一つに「食育」を掲げた。月々木、畑や田んぼの食材を使い、手作りのおやつを提供して、もう10年以上になる。



その食育の教科書となっているのが、「日本農業新聞」である。日本古来の行事と食、メニューからその由来など、子どもたちに伝える話のヒントがたくさんあることが教科書のゆえんである。

おやつ前の話で「食」という記事を引用させてもらったことがある。漢字の成り立ちを子どもは目を輝かせて聞いていたが、「食の俗説」にはもっと興味津々。「そうか、食べることは人を良くする、かあ」と、この日のおやつはみんな完食で、調理の先生もびっくりだった。

学童保育は共働きの親、家庭の子。毎月発行の便りにも、記事にあった共食の大切さを伝えてみた。これからも愛読したい。

講評

読者モニター調査で一番人気の「四季」を、学童保育の現場で活用しているのが面白い。今後、食育への共感が、一層広がっていくのを期待している。

田植え体験をしている学童保育所の子どもたち。



重田さんが代表を務める学童保育所で、毎月発行している便り。日本農業新聞の記事などを参考にしている。



●選んだ記事

四季

(令和3年4月28日付)

四季

2021.4.28

「食」という字は、「人」の「良」を合わせたような形から、人を良くする意味があるとの俗説が生まれた。▼もとは、食べ物を盛り、ふたをした形からできた。民俗学の宮本常一が子どもの頃、白米の弁当を持ってない児童は家に帰って屋敷を取った。貧しい家は、サツマイモや麦飯だった。「それを弁当に持って行く勇氣のあるものはなかった。だから、屋になる」とみはしって自分の家へ食べにかえたものである。「甘藷の歴史」にある▼社会の矛盾を映し出す食である。給食が始まって屋敷に帰る生徒はいなくなったが、「完食」の強制が問題となった。今は孤食、朝夕に独りぼっち食べる子どもが多い。▼いっしょに誰でも利用できる「しなやかな食」、幼心に芽生える孤独は和らげることもできないかもしれない。藤原辰雄さんの『食論』(ミヤマ社)に学ぶ▼政府の新しい食育推進基本計画は、家族が一緒に食べる「共食」を勧める。▼「家だんらん」ができていない実態もある。必要なのは、企業から両親を早く解放放つ、働き方改革である▼「みんなでおいしく、楽しく、食材が地場産だったほうがいい」。そして良い人になる。



J A広島中央は、ふれあい委員会を全支店に設立し、社会貢献活動などで地域との結び付きを強化してきました。私が所属する豊栄支店管内は、過疎化や耕作放棄地増加の問題が深刻化しています。課題解決に地元の県立賀茂北高校の生徒に日本農業新聞を読んでもらい、調べた



J A広島中央

長久 剛慈 さん 56歳

高校生の作文コンクールで 地域農業への理解を深める

ことや家族で話し合ったことなどを作文にするコンクールを豊栄支店ふれあい委員会で行いました。
2年生30人が令和3年8月の1カ月、記事を読み作文を書き、委員が審査しました。最優秀賞の高光宗泰さんは、農産物をスマートフォンで生産者から直接購入できる取り組みの記事を取り上げました。過疎化が進む地域では地域外に農畜産物をどう売るのが課題で、養鶏場を営む父と話す中、問題意識が高まり、打開策に取り入れたい思いを書いたそうです。コンクールで地域や農業への理解を少しでも深めてもらい、地域の将来や自身の進学、就職を考えるきっかけにつなげることができたと感じています。

講評

作文コンクールの開催は他者への広がりが高く、農業の新たなファンを獲得できる良い取り組みである。日本農業新聞の新たな活用方法として参考になる事例だ。

●選んだ記事

愛知県 地産地消促進へ
農産物の新たな流通網作り
(令和3年8月29日付)

令和3年8月30日に賀茂北高校で行われた、日本農業新聞を使った授業。長久さんらが参加し、生徒たちに作文の書き方の注意点を説明した。



愛知県 地産地消促進へ

愛知県は農産物の地産地消を推進するため、スマートフォンなどを活用し、生産者から直接農産物を購入できる仕組みを作る。県は生産者、実需の双方にアンケートを行い、ニーズを把握。2022年度には実証試験を行う。

22年度に実証試験

低減を目指す。直接取引の利点を生かし、西洋野菜や有機農産物などを想定し、「販路の流通網に乗りこえたい」という生産者の意向を踏まえ、販売先、販売時期、販売先、現在の販路への課題などを選択式で回答する。事業向けには、飲食店やウエブ上で農産物の出品する飲食店などが出品情報を注ぎ、生産者は注文を最寄りの集配所に届ける④共同配送車が集配所を回り、農産物を集荷・配達する。

県は21、23年度の3年間で取り組む。ニーズを把握するため、現在アンケートを実施中。生産者向けには栽培品目や品目数、出荷時期、販売先、現在の販路への課題などを選択式で回答する。事業向けには、飲食店やウエブ上で農産物の出品する飲食店などが出品情報を注ぎ、生産者は注文を最寄りの集配所に届ける④共同配送車が集配所を回り、農産物を集荷・配達する。

アンケートを踏まえ、エリアを選定し、22年度に実証試験する。

農産物の新たな流通網作り

「といった流れを想定する。代金もウエブ上で決済する。」



奨励賞

山形県米沢市 高校生
竹田 梨夢さん 17歳

食品ロス削減を考える

●選んだ記事 「エコな食」にポイント付与
(令和3年9月12日付)

SDGsで話題になっている食品ロスをどうにかできないかと思っていたところ、この記事を見つけてきました。私の家は飲食店を営んでおり、食べ物を残して帰ってしまうお客さまに悩んでいます。あと一口という量を残したり、少し食べただけで帰ってしまう人がいます。私は母と日常的に食品ロスについて話すことがあり、母は「店では材料が余らないように提供している」と言っていました。母も料理人として食品ロスのことを考えてお客さまに料理を提供していたことがとても嬉しかったです。

そこで、先ほどの記事のことを話してみると「とても良い案だけど、すでにポイントカードをお客さまに出しているし、さらに食品ロスポイントを作るとなると経営が厳しくなる」と話してくれました。私は自分でできるだけ食品ロスをしないように心掛けながら、店の手伝いをするときはお客さまにもお持ち帰りができることを呼びかけて食品ロスの削減に貢献していきたいと思っています。

環境省 22年度
「エコな食」にポイント付与
地産地消、期限近い食品購入…

環境省は、食品ロス削減の観点から、消費者が食品ロスを減らすための取り組みを支援する「エコな食」にポイント付与する。ポイントは、地産地消の食品や、賞味期限が近い食品を購入した際に付与される。ポイントは、食品ロス削減の取り組みを支援するために活用される。また、ポイントは、食品ロス削減の取り組みを支援するために活用される。また、ポイントは、食品ロス削減の取り組みを支援するために活用される。



奨励賞

千葉県J A 長生
長谷川 直子さん 33歳

TAC活動の右腕に

●選んだ記事 「私の渉外ノウハウ」栽培の手引「右腕」に
(令和3年4月29日付)

私は令和3年春にトマト農家に嫁ぎ、地元JAに入組した。平日はTAC職員として直売所出荷者を中心に巡回や企画に携わり、週末はハウス作業の手伝いや家事、資格取得に向けて勉強している。職員1年生の私にとって、入組前の研修からほとんど毎日購読している本紙の記事から学ぶことが多く、読み返したい記事が数多くある。今では切り抜くために取り置いている記事の山ができて、どうファイリングするか悩んでいる。

『私の渉外ノウハウ』は、他の職員が日頃どのようなことを考え、工夫されているかを知る良い教材となっている。組合員訪問時には千葉県の『野菜ハンドブック』の持参や、解決できなかった疑問点を農業事務所に問い合わせるなどして応えられている。

新規組合員の訪問時にたまたま読むために持っていた本紙をお見せしたところ、その方も「知りたい情報が載っているからすぐ購読したい」とおっしゃられた。まさに日本農業新聞はTAC活動の右腕だ。

私のノウハウ Q&A
栽培の手引「右腕」に
JAいわて平泉園芸課 菅原真一さん

「私のノウハウ」は、農業初心者からベテランまで、幅広い層から支持されている。特に「栽培の手引」は、農業の基礎知識や最新の栽培技術が満載で、多くの読者に愛読されている。また、「Q&A」コーナーでは、読者の疑問に丁寧に答えている。菅原真一さんは、JAいわて平泉園芸課の職員として、読者のために尽力されている。



奨励賞

岐阜県中津川市 農業
林 一美さん 90歳

食育かるたの制作に挑戦

●選んだ記事 楽しく農業学ぼう
(令和3年11月7日付)

「岐阜県農業経営アドバイザーの中濃ブロックメンバーが食育かるたを制作した」という記事が目にとまった。私は過去、市のPRのためのかるた募集に応募したことがあり、作品が採用された。かるた作りには自信がある。この記事を見て、私は東濃ブロックのメンバーだが、かるた制作に取り組みもうと思った。

農産物の種類は豊富、栗きんとんは全国屈指の有名産品。うまく売り込めば食育かるたとして地域の学校の教材にもなる。腕によりをかけて、作り上げてみようと思っている。一年かかるかもしれない、それでも寿命が持つか心配だが、挑戦することに意義があるかも…出来栄は後日…。

楽しく農業学ぼう
地域特産で食育かるた
中濃ブロックのメンバー

「楽しく農業学ぼう」は、農業の楽しさを伝えるための取り組み。地域特産の食材を使った食育かるたの制作は、食育と農業の両方を促進する素晴らしい機会。中濃ブロックのメンバーは、地域の特産品を活用し、食育かるたの制作に取り組んでいる。



滋賀県JAこうが
岡本 小百合さん 43歳

組合員に安心を届ける

●選んだ記事 特殊詐欺に気を付けよう
(令和3年10月26日付)

先日ご高齢のお客さまを応対した際、多額のお振り込みをされるということだったので理由を伺った。というのも最近管内でも特殊詐欺が多発していたからだ。しかしお客さまはなぜ自分の口座からの振り込みであるのにわざわざ理由を言わないといけないのかと少々不機嫌に尋ねられた。特殊詐欺多発により警察からも指導を受けている旨伝えたと納得いかない様子だったので、この記事を思い出しお客さまに見ていただくことにした。そして各地でさまざまな詐欺防止対策が行われていることを読んで納得していただいた。

私たちが農協の貯金残高を減らしたくないから大げさに言って怯えさせようとしていると思い込まれた。しかし、この記事を見せたことで私たちJA職員が本当にお客さまの貯金を大切に思う気持ちをご理解いただき、気持ち良く帰られた。この記事のおかげで信用を失うことなく安心を与えられた。



JA広島市
佐々井 信光さん 58歳

農家に肥料情報をつなぐ

●選んだ記事 食品廃棄物土改材に再生し好調
(令和元年5月14日付)

私は農業経験ゼロ。この支店に配属になって初めて認定農業者のお宅を訪問することになり「イロハのイから教えてください」と頭を下げました。その認定農業者の方を含む10人は、野菜の出荷組合を設立し、土づくりに命を懸けていました。しかし、土づくりに欠かせない剪定(せんでい)枝の入った牛ふんが、仕入れ先の高齢化で入手できない事態に。

わらをもすがる思いで「日本農業新聞」を読んでいたら、県内企業が作る食品廃棄物をリサイクルした有機質肥料が注目されている、という記事が！

すぐその方を訪問すると、その企業から肥料を仕入れることになり、これまで以上にわが支店から農業資材を仕入れてくださるようになりました。「微力ながらお役に立てた、やっと農協職員になったんだ」との思いが込み上げてきました。

この出来事には、後日談があります。しばらくしてその方が、多額の貯金を支店に預け替えてくださったのです。忘れられないエピソードです。



ご応募

ありがとうございます

ございました

「記事活用エピソード」募集には、331人の方から376点のご応募がありました。応募者の最年少は16歳、最年長は94歳と、昨年に続き幅広い世代の方から作品が集まりました。心温まるたくさんの方のエピソードをご応募いただき、誠にありがとうございました。





記事活用エピソード を募集しています

「日本農業新聞」で、営農や生活、勉強に役立った記事を読者の皆さんから、エピソードや事例などとともに広く募集します。ふるってご応募ください。

応募書類

原稿用紙やWord文書などに次の事項をご記入の上、ご応募ください。

- ① 読んだ記事の見出しと、掲載日
- ② 活用に関するエピソードや事例など(600字以内)
- ③ 応募者の氏名、住所(郵便番号含む)、年齢、性別、職業、電話番号

応募方法

- ① 郵送 または ② メール のいずれかでご応募ください。

応募・ 問い合わせ先

日本農業新聞 普及推進部「記事活用エピソード」募集係 宛
〒110-8722 東京都台東区秋葉原2-3

☎電話:03-6281-5803 ✉メールアドレス:suishin@agrinews.co.jp

審査

(1) 審査方法

- 社外識者を含む審査委員会を設置し、応募書類に基づき審査します。
- 応募多数の場合は、日本農業新聞社内で事前審査を行います。

(2) 審査基準

- 記事がきっかけとなり、その人自身の意識や行動に変化が生じたか
- その変化は自己完結的でなく、他者や組織、地域などへの広がりがあったか
- 「日本農業新聞を読みたい」と思わせるエピソードか
- 自らの体験や見聞に基づくエピソードであり、自身の見解や心情が伝わるか

表彰

最優秀賞 1点	受賞者には賞状と副賞(最優秀賞10万円、優秀賞5万円、奨励賞5,000円)を贈呈します。
優秀賞 2点	
奨励賞 5点	

発表

- 入賞した方に直接通知します。
- 最優秀賞の受賞者は、日本農業新聞が主催するイベントなどで表彰します。

その他

- 応募作品の著作権および著作権は主催者に帰属します(作品は返却不可)。
- 応募作品を冊子やパンフレットなどで紹介することがあります。

応募締め切り

令和4年12月6日(火) 必着